

2023 (令和5年) 平山郁夫画伯作品集 「平山郁夫画伯と行く心の旅路」 作品紹介

1993年(平成5年)平山郁夫画伯作品集としてカレンダー刊行から31年。皆様を最も魅了した作品を中心に、平山画伯の世界を歩んでまいります。

表紙「黎明薬師寺」は、大池(勝間田池)から望んだ景観である。朝の陽の光を受けて凜として立つ金堂。そして東塔と西塔。白鳳文化の心髄を今日に伝える継承者としての薬師寺の矜持、そしてそれを支えた当時の人々の情熱と誇りをこの作品は代弁しているように思える。ここに画伯の薬師寺に対する崇敬の念がうかがえるようだ。

1・2月「大仏開眼供養記図」は、奈良の大仏として知られる東大寺の盧舎那仏の開眼供養式を描いたものである。752年(天平勝宝4年)4月、聖武太上天皇、光明皇太后、孝謙天皇行幸のもと、インド人の僧・菩提遷那を開眼導師に迎え、式典は盛大に執り行われた。古代史を飾る一大ページントを画伯は巧みに描ききっている。

京都には花の名所は多い。仁和寺も御室桜と呼ばれる桜で知られる。御室桜は遅咲きで、4月の中旬から下旬にかけて見頃となる。与謝蕪村の高弟・黒柳召波は「仁和寺やあしもとよりぞ花の雲」と詠んだが、御室桜は低木で、地上数十センチメートルでも花を咲かせる。画伯によれば3・4月「仁和寺月華」は御室の春風に誘われて描いたとのこと。

5・6月「高耀る藤原京の大殿」は、平山画伯が心身ともに最も充実していた頃の代表作の一つである。時に画伯39歳。中国の長安を模して造られた藤原京は大和三山(香具山、畝傍山、耳成山)に囲まれた地にあり、持統天皇の694年から文武天皇、そして、元明天皇の710年に平城京へ移るまでの3代16年間続いた都。画伯は、想像力を縦横に駆使して、金と緑を基調に色としても幻想的に描いている。

祇園祭は八坂神社の祭り。祭の多い京にあって、単に「祭り」と言えば祇園祭を指す。この祭りのハイライトは、7月14日頃から始まる宵山に続く山鉦巡行であろう。薨が連なる町家の間を通る山鉦。これぞ京の祭りといった感がする。7・8月「祇園祭」は、画伯の想像力で描いた作品で現実には描かれている地はない。作品は1週間で仕上げられた。

修学院離宮は、第108代天皇の後水尾上皇が東山36峰の一つ修学院山に造営された山荘である。桂離宮が数寄を凝らした造りであるのに対し、こちらは自然の中に自ら溶け込んでいく趣をもっている。画伯は大作「平成洛中洛外」の取材のため、2002年(平成14年)の秋にここを訪れている。9・10月「修学院離宮秋声」は、その時の成果である。

11・12月「寧楽の幾望」は平山ブルーの中に浮かぶ薬師寺である。幾望とは幾ど望、つまり満月に近いという意で、陰暦14日の月を指す。寧楽は古都・奈良の意と共に安らかに楽しむという意でもある。来る新しい年が病魔から解放され、争いのない豊かで明るく楽しい年であることを祈念したい。